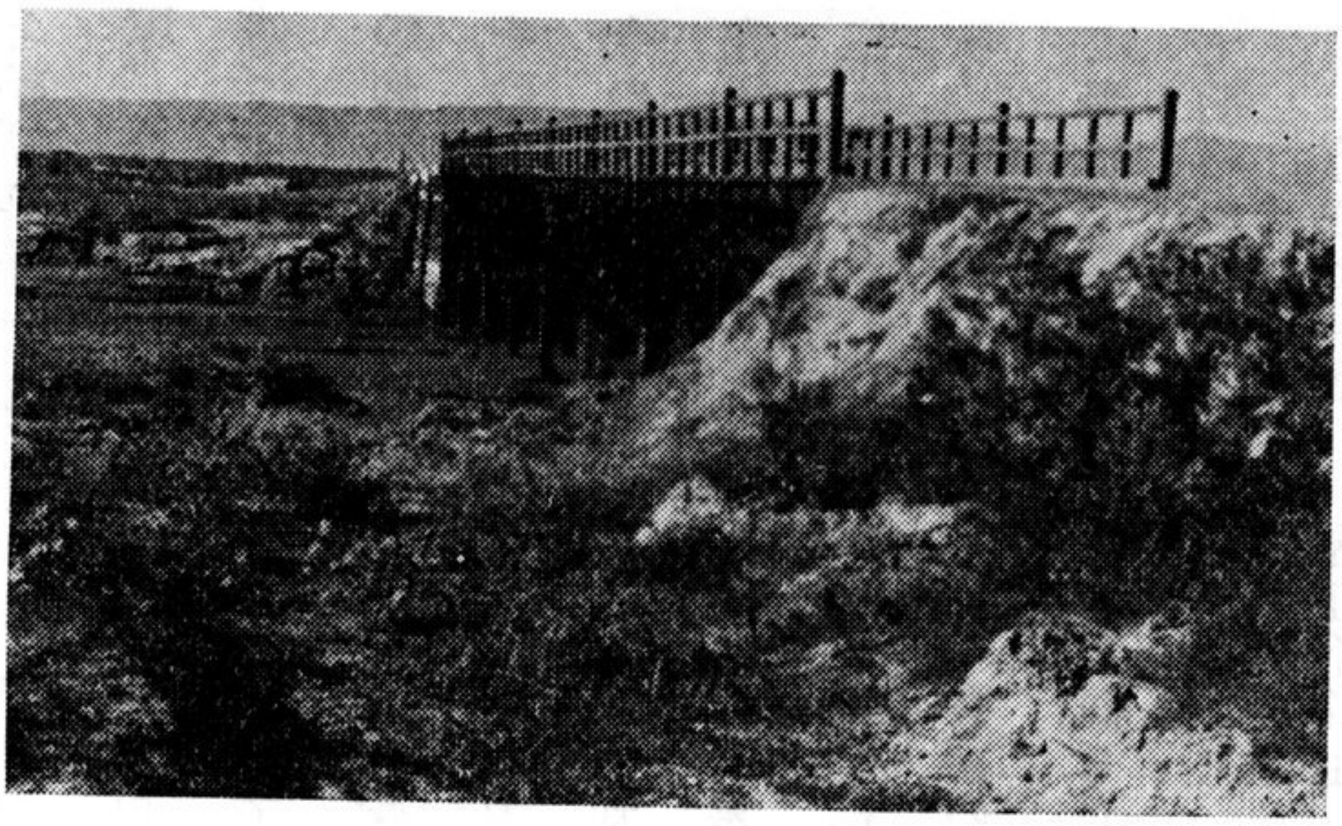
王墻有青塚　炎漢無寸土　要□□傳人　遂應受奇苦

と讀まる。裏面に老友沅叔傅增湘氏の題記あり。懷かしく讀みもて行けば、此等の刻碑につき、耆英彥昇二詩の外見るべきなし。すべて廢棄すべしと喝破せるなり。附近いぶせき住居に數人の蒙古人の團欒せる外人影も無く、天地寂として死せるが如し。匈奴の鐵騎幾たびかこのあたりを往來しけむ。鳴鏑胡笳耳底に響く思ひして、低徊半時ばかり、もとの道を引返す。途に兩河を渡る。南が大黑河、北が小黑河なりと案内の人はいへり。豐州の北に官山あり、上に九十九泉ありて黑河の源を成せることは、遼史の研究に當りて屢々遭遇したる文字なりしが、今ぞその上に渡せる木橋を、徒歩にも駝馬にもあらで、ガソリンの烟曳きながら越え行くなり。暫く車を駐めてまた感慨に耽る。堤防を築き橋を架せるところにては大黑河の幅も僅に十數間に過ぎざれど、少しく下流を驢を驅りて渡り行く人の有樣を見れば、兩岸の草原は河床の濕地と覺しく、可なりの河幅を有せるなり。「大」の名を冠せるも理なりけり。黑河といへば、遼末耶律大石が西方に逃れたる時に渡りたる河として知られたる名にして、余も今より二十數年の昔、その所在を究むるにつきて心を勞したることありしが、今見るものは同名ながらそれには非じ。この事別に考を述ぶべきなり。



大黑河　圖四